

新手枕での、光に対する紫の抵抗

望月郁子

内容

- 一 新手枕での紫の意識と北山の僧都の「戯れにても御覧じがたくや」
- 二 紫が処女である証例を物語の本文に求める
- 三 物語の主人公としての光・紫の新しさ―信仰と女性サイドからの皇統の血の堅持

一 新手枕での紫の意識と北山の僧都の「戯れにても御覧じがたくや」

「一」(新手枕での紫の意識) 故葵上の正日(四十九日、十月十余日^①)を済ませて二条院に帰った光は、紫(十二歳)に新手枕を求めた。

「つれづれなるままに、ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつつ日を暮らしたまふに、心ばへのらうらうじく愛敬づき、はかなき戯れごとの中にもうつくしき筋をし出でたまへば、…忍びがたくなりて、心苦しけれど、いかがありけむ、

人のけぢめ見たてまつり分くべき御仲にもあらぬに、男君はとく起きたまひて、女君はさらに起きたまはぬ朝あり。(葵七〇)

新手枕を求められ、朝起きない紫の内面が問題である。

「…人間(人ノイナイ時)に、からうじて頭もたげたまへるに、ひき結びたる文御枕のもとにあり。何心もなくひき開けて見たまへば、

あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし夜の衣を

と書きすさびたまへるやうなり。かかる御心おはすらむとはかけても思しよらざりしかば、などてかう心憂かりける御心をうらなく頼もしきものに思ひきこえけむ、とあさましく思さる。(七一)

光が尼君没後の京の邸を夜訪問し、御帳の内に入ってしまった、いわゆる疑似結婚の場合は、「単衣ばかりを押しくくみて、わが(光)御心地も、かつはうたておぼえたまへど…(若紫二四五)」であり、二条院での最初の朝も「君は御衣にまとはれて臥したまへるを、せめて起こして…(二五七)」である。新手枕まで、紫は光に肌を求められたことはなく、許したこともなかったであろう。上掲の光の歌「あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし夜の衣を」を見た紫が「かかる御心」と嫌悪するのは、紫の意識に、八男に肌を許してはならない¹が鉄則として確立していたことを意味する。尼君から、それを厳しく躰けられて育ったのである。(八歳にして紫は出産拒否の志向が固まっていた。²)光に対して、光はこういうことを紫には決して求めずに、紫を大切にするはずだ、という潜在意識が確立しているかのごとくである。

昼頃、光が来て、顔を見せると、「いよいよ御衣ひき被きて臥したまへり」であり、光がいろいろ機嫌を取っても「まことにとつらしと思ひたまひて、つゆの御答へもしたまはず」で通す。紫の抵抗ぶりは、若紫巻で、北山の僧都が光に釘をさして言った「戯れにても御覧じがたくや」とびったり一致する。明らかにし得ないが、僧都のこの言葉は、幼少の

紫に、仏との結縁的な儀式を、僧都が授けていた可能性を示唆するか。

「日ひと日入りゐて慰めきこえたまへど、解けがたき御気色いとどらうたげなり。(葵七二)」である。

「二」(光の紫理解と北山の僧都の忠告) 紫の厳しい抵抗に直面して、光の脳裏には、北山の僧都の「戯れにても御覧じがたくや」⁽³⁾がよみがえり、光は、僧都の忠告が理解でき、肌を許さない紫をそのまま受け入れなければならないと悟れたのではないか。

「君は、こしらへわびたまひて、今はじめ盗みもて来たらむ人の心地するもいとをかしくて、年ごろあはれと思ひきこえつるは片端にもあらざりけり、人の心こそうたてあるものはあれ、今は一夜も隔てむことのわりなかるべきこと、と思さる。(七三)」

「盗みもて来たらむ人」に禁忌の姫君のイメージが感じ取れる。光に対しあくまで肌を許さない紫が、光の理想の女君となつたのではないか。

光は、惟光に三日夜の餅をそれと気付かれないように届けさせ、紫との結婚成立を二条院の中で示した。

紫の光拒否は、なまやさしいものではない。光は「新手枕の心苦しくて」紫に付きっきりである。光は「御裳着」をし、実父兵部卿宮に知らせようとするが、

「女君はこよなう疎みきこえたまひて、年ごろよろづに頼みきこえて、まっはしきこえけるこそあさましき心なりけれ、と悔しうのみ思して、さやかにも見あはせたてまつりたまはず、聞こえ戯れたまふも、いと苦しうわりなきものに思し結ばはれて、ありしにもあらずなりたまへる御ありさまを、(光は)をかしうもいとほしうも思されて、「年ごろ思ひきこえし本意なく、馴れはまさらぬ御気色の心憂きこと」と恨みきこえたまふほどに、年もかへりぬ。(七六―七七)」となつた。七十日程も紫は自分に閉じ籠り続け、光に心を開かない。新手枕における紫の意中は、従来、心の準備のない

若い女性の途惑いとされてきたが、そう見るには、紫の抵抗は厳しすぎ、期間が長続きし過ぎる。少納言の乳母も付き添っている。へ男に肌を許してはならないと尼君に厳しく躰けられた紫であると思なければならぬ。

「二・三」（少納言の乳母の心中）尼君・僧都の紫の育て方は別に論じた⁽⁴⁾。それを承知しているのは少納言の乳母である。乳母の言動を確かめておこう。

「（左大臣家から帰り、光）：今はと絶えなく見たてまつるべければ、厭はしうさへや思されむ」と語らひきこえたまふを、少納言はうれしと聞くものから、なほあやふく思ひきこゆ。やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきやたちかはりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。（六九）」

少納言の「なほあやふく思ひきこゆ」を、地の文は光の対女性関係の多さへの危惧とするが、上述の新手枕に対する紫の反応を先取りしての乳母の危惧―紫の拒否に光がどう対応するか、姫君の意志が守られないのではないか―がないとは言切れまい。乳母は北山で僧都が光に一言釘をさしたのを知るまい。

「（祝いが済んで下げられた三日夜の餅の箱を見て）少納言は、いとかうしもや、とこそ思ひきこえさせつれ、あはれにかたじけなく、思しいたらぬことなき御心ばへを、まづうち泣かれぬ。「さても、内々にのたまはせよな。かの人もいかに思ひつらむ」とささめきあへり。（七四―七五）」

紫が光に背いても光は三日夜の餅により、光の紫への愛の証明をした。乳母の先の危惧は解消した。三日夜の餅は、通い婚であれば女方が準備する。光が少納言に頼まなかったのは紫の抵抗があったからである。「さても、内々にのたまはせよな」は、三日夜の餅のことでもあるが、乳母として光に事前に打ち明けるべきことも打ち明けられず、傍観者の立場に立たされての本音であろう。乳母は紫の光拒否を非難しない。光は、紫の要求―処女でありたい―を是認せざるを得ない。紫の要求は、言い換えれば出産拒否である。紫にとって大切なのは仏である。仏の加護を受けることのできる清らかな生

をとでもいった意識なのではないか。光は拒否する紫に愛を新たにしている。

二 紫が処女である証例を物語の本文に求める

紫が光に肌を許さず、光はそういう紫を評価して夫婦となり、自ら禁欲を保ち、紫を護っている。これは、当時の物語の主人公の男女として、信じがたい特殊なものである。紫が永遠の処女であることのできそうな証例を物語の本文に求めた結果、現在のところ、取り上げるべきは、以下の六箇所である。以下、それらを検討する。

「一」(明石姫君の存在を光が紫に打ち明ける場面)

「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなん。女にてあなれば、いとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひ棄つまじきわざなりけり。呼びにやりて見せたてまつらむ。憎みたまふなよ」と聞こえたまへば、面うち赤みて、「あやしう、常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながら疎ましけれ。もの憎みはいつならふべきにか」と怨じたまへば、いとよくうち笑みて、…(濤標二九一)」

光は宿曜の予言を明かされ、今後実子の誕生はないと知っている。従来読みでは、光と紫との結婚を世間普通のそれと見て、子のない女君に対する光のデリカシイのなさを如何ともできないとなるが、物語の事実はそのではない。

新手枕以来、光に肌を許さず、世間が石女うますめと見ようと問題にもしない紫であるからこそ、光が「さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなん」と本音が言えるのである。

紫が赤面するのは石女であるからではない。光の「憎みたまふなよ」に恥辱を感じてである。ニクムという感情を持つこと自体の否定である。そお言う紫を光は完璧だと受けとめて「いとよくうち笑」む。

光の「呼びにやりて見せたてまつらむ」は、光の姫君ゝ宿曜が将来の「后」と予言したことは光だけが知っているゝを養育できるのは紫以外にないと光が決めていることの表明である。故桐壺帝に導かれ、光がモットーとする八皇統の血の堅持Vを実現するためには、后となるべき姫君の血を汚してはならない。みだりに男に肌を許してはならないと厳しく躰なければならぬ。光に対してそれを地でいったのが紫である。光が紫に明石姫君を育てさせ、さらに明石女御の宮達を育てさせるのは、皇統の血を堅持する子育ての適任者として紫を認めているからである。その意味で、紫は光にとってかけがえない女君である。

「二二」(明石姫君入内に際しての紫の付き添い方ゝ付き添いを明石君に譲るゝ)

ア「かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、常にながながしうはえ添ひたまはじ、かかるついでに、かの御後見をや添へまし、と思す。(藤裏葉四四九)」

光の心中である。光の姫君の入内であるから、「北の方」と光が認める紫が付き添うべきであるが、光は紫を「常にながながしうはえ添ひたまはじ」と思う。「え添ひたまはじ」は不可能の推量である。光が紫の何を念頭においてそう判断するのかが問題である。紫自身も「みづからはえつとしもさぶらはざらむ(後掲イ)」と自分には出来ないことと光に言っている。光と紫との二人だけに通じる紫の特殊事情が問題なのである。この、紫に出来ないこととは、が従来不問に付されてきた。従来、「かの御後見(実母明石君)をや添へまし」が光の真意であり、紫がその光の気持ちを見抜いて女御の付き添いを明石君に譲るのだと説かれてきたが、それ以前に、紫の特殊事情があるのは明らかである。新手枕での光に対する紫の抵抗以後、紫が処女を通してきたとすれば、入内直後の女御に、「常にながながしうはえ添ひたまはじ」「みづからはえつとしもさぶらはざらむ」は至極当然な判断である。

イ「上(紫)も、つひにあるべきことの、かく隔たりて過ぐしたまふを、かの人(実母明石君)もものしと思ひ嘆かる

らむ、この（姫君の）御心にも、今はやうやうおぼつかなくあはれに思し知るらん、方々心おかれたてまつらんもあいなし、と思ひなりたまひて、「このをりに添へたてまつりたまへ。まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶ事の心いたる限りあるを、みづからはえつとしもさぶらはざらむほど、うしろやすかるべく」と聞こえたまへば、（四四九）

紫は自分から光に「このをりに添へたてまつりたまへ。…」と申し出る。光と紫との呼吸はぴったり合っている。

「いとよく思しよるかなと思して、「さなん」とあなたにも語らひのたまひければ、（四四九）」

と、話は光から明石君に伝えられた。

「いみじくうれしく、思ふことかなひはつる心地して、人の装束何かのことも、やむことなき御ありさまに劣るまじくいそぎたつ。…（四四九）」

「その夜（入内の夜）は、上（紫）添ひて参りたまふに、御輦車にも、立ちくだりうち歩みなど人わるかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただかく磨きたてまつりたまふ玉の瑕にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。（四五〇）」

その夜の作法は紫は「御輦車」、明石君は「うち歩み」の大差がある。

ウ「御参りの儀式、…限りもなくかしづきすゑたてまつりたまひて、上（紫）はまことにあはれにうつくしと思ひきこえたまふにつけても、人に譲るまじう、まことにかかることもあらましかばと思す。大臣も宰相の君も、ただこのことひとつをなん、飽かぬことに思しける。（四五〇）」

「人に譲るまじう、まことにかかることもあらましかば」は、養女としてここまで育ててきた女御を、光に肌を許さず、出産経験がないが故に、実母に譲らなければならない紫の本音の表明である。光も夕霧も、女御が紫の実子であればとそれ

のみを無念に思っている。この一文は、△明石君母子のために▽が、紫が付き添いを明石君に譲る、真の理由ではないことを明瞭に物語っている。

「三日過ぎしてぞ、上はまかでさせたまふ。(四五〇)」

サセタマフのサセを紫に対する最高敬語と見るむきがあるが、サセを使役、タマフの主体を光とすれば、紫の退出は光の責任となり、紫に対する敬語法上の特異例とはならない。

「たちかはりて参りたまふ夜、御対面あり。…出でたまふ儀式のいよそほしく、御輦車などゆるされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひくらぶるに、さすがなる身のほどなり。(四五一)」

光の△北の方▽紫と明石君との処遇の差である。光の意向の反映か。

エ「その御ためには何の心ざしかはあらむ。ただ、この御ありさまを、うち添いてもえ見たてまつらぬおぼかなさに、譲りきこえらるるなめり。(若菜上一三二)」

光が明石君の慢心を戒めている言葉。「うち添いてもえ見たてまつらぬ」の真意は、上述の光の心中(ア)、紫の光への言葉(イ)におけるのと同じである。その真意が明石君に見抜けたかどうか。出産経験がないで留まるのではないか。

「二三」「まことに君をこそ、いまの心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ、いと無心にしなしてしわざぞかし」

問題の()内は、玉鬘を六条院に迎えて喜んだ光が、紫に言う言葉である。

夕顔の女房であった右近は、夕顔死後、光付きの、更に紫付きの女房として六条院に仕えていた。長谷寺に詣でて、夕顔の忘れ形見の玉鬘(雨夜の品定めで頭中将が語った行方不明の女子)の一行に出会った。右近は乳母に、光が

『かの(夕顔の)御かはりに見たてまつらむ、子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ね出でたと人には知らせて』

と、その昔よりのたまふなり。：（玉鬘一一五）」と打ち明ける。

右近から知らされた光は、まずは、玉鬘に歌を贈り、返歌を見て安堵し、花散里の住む「丑寅の町」の西の対に住ませることにする。

「上にも、今ぞ、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまひける。かく御心に籠めたまふことありけるを、（紫は）恨みきこえたまふ。（一二五）」

打ち明けられれば素直に光を理解しようとする紫である。

六条院に迎えた夜、光は玉鬘に会い、「めやすくものしたまふを、うれしく思して、上にも語りきこえたまふ。（一二一）」以下が問題を含む光の語りである。

「さる山がつの中に年経たれば、いかにいとほしげならんと悔りしを、かへりて心恥づかしきまでなむ見ゆる。かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬の内好ましうしたまふ心乱りしがな。すき者どもの、いとうるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあはぬ人の気色見あつめむ」とのたまへば、「（紫）あやしの人の親や。まづ人の心励まさむことを先に思すよ。けしからず」とのたまふ。「（光）まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし」とて笑ひたまふに、面赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯ひき寄せたまうて、手習ひに、恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすぢを尋ね来つらむ

あはれ」とやがて独りごちたまへば、（紫）げに深く思しける人のなごりなめりと見たまふ。（玉鬘一三一―一三二）」夕顔の忘れ形見を「親」として六条院へ迎えた光は、まずは、玉鬘を光の女子と人々に知らせ、若い貴公子達が六条院にどう集まってきて、どんなに夢中になるか、それが見物だ、玉鬘を大事に育てようと、上機嫌で紫に語りかける。紫は、

「そんな親がありますか、男の方々を夢中にさせようと、真っ先に思いなさるとは、とんでもない。」と批判する。それが光の「まことに君をこそ…（ソウダ君（紫）ヨコソ、ソウデキタノダ…）」を引き出した。光の意識の底に、へ紫の望み通り処女を守ってあげてきたVがなければ、言えない一言である。「まことに君をこそ…」は、光と紫の二人の間だけに通じる光のジョークである。紫が「面赤」めるのは、男性の心を乱す種とされることに對する恥辱感もさることながら、紫の光批判の一言「けしからず」が「まことに君をこそ…」を導いたと意識してであろう。

光は手習いに、夕顔への変わらぬ思いと、その遺児に遭遇できた感慨を述べ、紫は光の夕顔への思いの深さを知った。上掲の「この籬の内好ましうしたまふ心乱りにしがな。…なほうちあはぬ人の気色見あつめむ」は、玉鬘十帖の予告でもある。

光にとって玉鬘は、夕顔の忘れ形見であると同時に、政治的には政敵内大臣の娘であり、優れていればいるほど藤原氏長者の家の将来を左右できる重要な存在である。雨夜の品定めでの、頭中将のとおきの告白を聞いて以来、政治家としての光は、その行方不明の娘を手中に入れなければならないと気に掛けて来たに違いない。

紫と玉鬘との共通性は、光が実質上育ての親となること、女性二人が処女であることである。

光の玉鬘の育て方であるが、見通しを言えば、紫の場合とは異なり、あくまで臣下の理想的な娘をめざしたと見れそうに思う。玉鬘に対する光の女性教育には、対紫の経験なくしては不可能と感じられる一面がある。

「二四」（「うちとけてはたあらぬ御用意」）

朱雀院の女三宮が六条院入りする。新婚三日の夜の光の夢に紫が現われた。光は「夜深きも知らず顔に（三宮方を）急ぎ出でたまふ（若菜上六八）。」帰って御帳に入り、

「『…さるは罪もなしや』とて、御衣ひきやりなどしたまふに、すこし濡れたる御単衣の袖をひき隠して、うらもなくな

つかしきものから、うちとけてはたあらぬ御用意など、いと恥づかしげにをかし。かぎりなき人と聞こゆれど、難かめる世をと思しくらべらる。(六九〇七〇)」

女三宮のもとから帰った光を床に迎える紫は「うちとけてはたあらぬ御用意」をしている。ウチトクは着物の紐を解くことを言うのが原義。男に肌を許さない紫は、独り臥しても「うちとけてはた(ヤハリ)あらぬ御用意」を崩さない。それを目にして光が「いと恥づかしげ」と感じるのは、女三宮の光の迎え方に、紫のような「用意」がないからであろう。一夫多妻制の上流貴族社会で、女君が自己の精神を「我は我」と守るためには、へ男に肌を許さないが、唯一ぎりぎりの手段ではなかったか。紫の「うちとけてはたあらぬ御用意」は、まさにその手段そのものである。「かぎりなき人」とは、朱雀院の最愛の姫宮をいう。「難かめる世を」とは、紫のように男に対して自己を守ることとはできないものなのだ、という光の認識である。この「かぎりなき人と聞こゆれど、難かめる世を」は、柏木による女三宮の悲劇の伏線ないしは予告であると同時に、光の紫の育て方と朱雀の女宮の育て方との対比でもある。朱雀は自分の女宮に、皇統の血を護る意識を植え付けていない。

「二五」(「親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし」)

女樂の翌日、光は紫と語り、光自身の半生を述懐し、更に、紫と光との関係に及んで、「君の御身には、かの一ふしの別れ(須磨の別れ)より、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、みなかならずやすからぬもの思ひ添ふわざなり。高きまじらひにつけても心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。その方は、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや。：(若菜下二〇六―二〇七)」

という。「親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる」は、二人の関係が世の普通の夫婦のそれではないことを意味する。

紫相手にだけ言える光の物言いである。須磨の別れの時期だけを別とすれば、光は終始紫と同棲し、紫を護って禁欲に徹してきた、と言いたげである。紫八歳の北山での出会いで、紫は光をへ後の親と意識しはじめた。二条院に紫を迎えて、光はへ女親なき子への意識で紫を育てた。新手枕以後は、男に肌を許さない・出産拒否という紫の要求を光は全面的に受け入れて、紫を、北山の僧都が仏から授かったへ禁忌の姫君として守り、社会的に「北の方」とし、夫婦生活をしてきた。紫が仮に禁忌の姫君的存在でないならば、「親の窓の内ながら」といえる夫婦関係がほかに存在し得るであろうか。「その方は、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや」は、光以外の誰に、女性へのこういう対し方ができるかと、言いたげな口吻である。晩年に至っての、紫との夫婦関係の述懐である。

「二六」(光の自覚―物語の主人公としての特異性)

「くまのの物語の絵にてあるを、「いとよく描きたる絵かな」とて御覧ず。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへる所を、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。「かかる童どちだに、いかにされたりけり。まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」と聞こえ出でたまへり。げにたぐひ多からぬことどもは、好み集めたまへりけりかし。(螢二二四―二二五)」

光の紫相手の言葉。物語絵を借りて、光自身が紫の夫としての自分を「まろこそなほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」と自認している。従来、光の冗談で片付けられてきたが、この光の発語を地の文は、聞コエではなく、聞コエ出デとする。秘密の打ち明けとするところに、物語作者の新しい主人公夫婦の創造に対する自負を読み取らなければならないまい。

以上「二一」～「二六」の問題部分は、「二二」エ・「二四」を除き、すべて紫と光との対話に現われ、当事者二人だけが知る夫婦関係の秘密がちらりと語られている。二人の間だけに通じる内容である。紫が永遠の処女であり、光が紫を

護って禁欲を貫いたとしてこそ、当該のそれぞれの本文が矛盾なく解釈できる。

三 物語の主人公としての光・紫の新しさの意味―信仰と女性サイドからの皇統の血の堅持

女君が、かぐや姫のやうに月に帰るのではなく、永遠の処女でこの世を生き抜くには、最愛の女性を処女のまま護り通す男君が必要不可欠である。源氏物語作者は男女の主人公光源氏と紫とにその役を課した。そこにこそ源氏物語の人物設定上の真の新しさがある。

なぜへ永遠の処女でなければならぬのかであるが、末世到来を間近にひかえた源氏物語成立当時の女性の《女人往生》への切実な願望と切り離せまい。信仰が第一にあり、合わせて源氏物語五十四帖を貫く底流《皇統の血の堅持》との関わりがありそうである。この二点について若干述べる。

「三1」(信仰の問題) 北山の僧都と尼君が紫に期したものは、浄土教の説く《女人往生》即ち阿弥陀を念じ、極樂の莊嚴を人々に観想させ衆生を往生に導く「生ける仏」として、末世の日本における韋提希夫人いだいけふにん的役割を果たすことであった。北山の僧都が若い光に「戯れにても御覧じがたくや(遊び半分デモ、光ニモ、肌ヲ許サナイノデハ)」と言った根拠がそこにあったであろう。新手枕での紫の抵抗に接して、光は僧都の真意を悟り、紫が女人往生できるように、紫に対して禁欲に撤して紫を護った。信仰を抜きにしては、紫も光も充分には語れまい。(仏事における紫の活躍は稿を改めて論じたい。)

「三2」(女性サイドからの皇統の血の堅持) 新手枕における紫の光に対する抵抗、男に肌を許してはならない、そのこと自体が物語の女主人公として意外だと誰しも感じるであろう。

筆者は先に、《皇統の血の堅持》が『源氏物語』五十四帖の底流をなすという見解を、桐壺帝を軸に為政者サイドから提唱した。⁽⁵⁾ その際、紫をはじめ女君は殆ど取り上げなかった。しかし、《皇統の血の堅持》とは、女宮・女君サイドからすれ

ば、女宮・女君一人一人の育てられ方・生き方如何に関わる肝心要というべき問題である。

この見地からすれば、新手枕における光に対する紫の抵抗は極めて重要な意味を持つ。紫をしてそうさせたのは祖母尼君の厳しい躰である。光にとって紫はいわばへ禁忌の姫君として得難い女君となった。光により、紫はその「北の方」にふさわしくへ皇統の血を護る理想の女君に育てられた。宿曜が「后」になると予言した光のただ一人の姫君（明石姫君）を光は紫に育てさせた。更に、明石女御の宮達の養育も光は紫に任せ、女御の実母明石君にはさせなかった。この点で、光は明石君に対して非人情に徹している。そこまで徹しなければ、光の目指す《皇統の血の堅持》の実現は不可能なのであろう。『源氏物語』作者の厳しさである。

子の育て方と育てられた子の生き方とは同一不可分なものがある。視点を広げて、桐壺帝の皇子三人の場合をおおづかみに見ておきたい。

光は、皇統の血の継承者を育てるという意識で冷泉と紫を、臣下の養育の意識で夕霧と玉鬘を、それぞれ理想的に育てた。臣下の養育を任されたのが花散里である。（いわゆる第一部）

朱雀は、女三宮・女二宮を育てたが、朱雀に皇統の血の堅持の意識が希薄で、姫宮それぞれが自分を護れなかった。（いわゆる第二部）

立太子問題での犠牲者宇治八宮は、大君・中君を男手一つで育て、父亡き後、二人それぞれが皇統の血を守った。浮舟は八宮に認知されなかったが八宮の血を汚さなかった。光の子孫が繁栄する。（いわゆる第三部）

これら皇統の血の継承者を軸に藤原氏長者及びその周辺の人々の育てられ方・生き方が絡む。

以上のごとくであるとすれば、《皇統の血の堅持》が、女宮・女君方サイドからしても『源氏物語』全体を貫く底流であるとしてよさそうである。

今一つ、光に一言しておかなければなるまい。

光源氏といえば、一般には、美男で色男の代表とされ、女性に対する禁欲など想像もできないと信じ込まれているが、その実、光自身はかなりストイックである。

桐壺帝の皇子十二人に対し、光の子は男二人・女一人の三人に過ぎない。

女君達からもそうそう許されてはいない。藤壺は寄せ付けず、葵には疎んじられ、空蝉には拒否され、夕顔には死なれ、紫は出産拒否、前坊の遺児への思いは母六条御息所によって阻まれ、朝顔にも距離を保ち続けられた。花散里とは、はじめから床を共にする意識がない。受け入れられたのは、末摘花・朧月夜・明石君・女三宮である。女房レベルの女性たちとの交渉はあっても、子は知られていない。光自身が《皇統の血の堅持》の意識で固まっているから、光自身により、女房レベルは論外とされたであろう。明石君との縁を、光は《住吉の神の導き》と意識した上で受け入れた。⁽⁶⁾

これが、帚木巻冒頭で「さるは(実ハ)、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし(五三)」と言われる光の実態である。

〔付記〕この小論は、「心ざしおかれたる極楽の曼陀羅」(二松学舎大学人文論叢第七十一輯平成十五年十月)の〔四〕を踏まえ、北山の僧都の「戯れにても御覧じがたくや」を重視し、紫が処女であることの論証を主目的としてまとめなおしたものである。

〔注〕

(1) 葵の火葬が「八月廿余日(葵四八)」

- (2) 望月郁子「尼君・僧都及び光による紫の姫君の育て方」(二松学舎大学人文論叢第七十三輯平成十六年十月)の「一三」
- (3) 注(2)の論文の「一二」
- (4) 注(2)の論文
- (5) 望月郁子『源氏物語は読めているのか 末世における皇統の血の堅持と女人往生』笠間書院 二〇〇二年六月
- (6) 望月郁子「宿曜の予言の内容を光は何時知ったか」(二松学舎大学論集第四十七号平成十六年三月)の「四」